

自民まどか・自民大野城 視察報告書

研修者	天野嘉久孝、田中健一、高山やす子、森和也、中村真一、関井利夫、 山上高昭、井福大昌
日時	平成30年11月14日(水)～15日(木)
場所	宇都宮市文化会館
テーマ	基調講演：「地域共生社会」をどうつくるか －2040年を越える自治体のかたち－
対応者 (講師)	中央大学法学部教授 宮本 太郎 氏
概 要	
<p>1. 講演要旨</p> <p>(1)自治体が直面する2040年問題：重量挙げ化と漏斗化の日本</p> <p>①日本人の半数が107歳まで生きる時代</p> <p>②なぜ幸福感が広がらない？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・困窮化：年金削減で生活保護受給者が2040年には200万人を超える ・孤立化：高齢単身男性は会話頻度も少ない <p>③現役世代も力が発揮できない</p> <ul style="list-style-type: none"> ・奨学金返済や非正規雇用の増大による生活困窮化で、未婚率の増加 <p>④「支える」「支えられる」の二分法では「重量挙げ」社会に</p> <ul style="list-style-type: none"> ・現役世代と高齢世代比が10対1から、0.5対1で「肩車」より「重量挙げ」 <p>⑤漏斗化する日本</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地方から東京に若年層の流出 ・地方は人口減と高齢化：東京は人口増と高齢化 <p>⑥2040年問題は重量挙げと漏斗化が限界点に</p> <p>地方と東京圏がそれぞれ違う形で持続可能性が問われる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「重量挙げ」化と「漏斗」化 <p>(2)ピンチをチャンスに、チャンスを現実にする道</p> <p>①「ピンチをチャンスに」「チャンスを現実にする」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・困窮・孤立を超えて皆が人財のまちへ ・(移住しなくても)ずっと出番のあるまちへ ・必要縁、新しい家族縁、地縁でコンパクトな拠点を <p>②これまでの地域福祉、これからの地域福祉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・雇用：安定雇用から雇用不安定化 ・福祉の目的：働けない人を保護することから、困窮を抱えた人を元気にすること ・方法：高齢・障害・困窮の縦割りから縦割り超えた包括支援へ <p>③社会保障支出(GDP比)は、イギリス、オランダを超えたが、困窮や孤立は抑制できていない。</p> <p>④これからの地域づくりの新しい目標「地域共生社会」とは</p>	

「制度・分野ごとの縦割りや支え手受け手という関係を超えて、地域住民や地域の多様な主体が我が事として参画し、地域をともに創っていく社会」

(3) 困窮と孤立を超えて「誰もが人財」のまちへ

- ① 「誰もが人財」を目指す生活困窮者自立支援制度の目指されるべきかたち
 - ・ 高齢者介護・生活保護・障害関連・要保護児童等への状況に応じた支援によるユニバーサル就労による自立
- ② 「誰もが人財」への包括支援
 - ・ 市町村の全体的包括支援と小中学校区毎の支援
- ③ 職場の間口を広げ共生の場をつくる、ユニバーサル就労
 - ・ 業務を分解し、適材適所に。みんなが元気になる福祉
- ④ 自治体が企業に仕事の切り出しを働きかける
- ⑤ 農業・自伐型林業の可能性を活かす
 - ・ 青森県弘前市：就労自立支援室を新設し、リンゴ課と農業政策課との連携リンゴ担い手確保、地方移住の促進でユニバーサル就労を目指す。
- ⑥ 地域共生は「ご当地流」が大事。しかし「元気になるチャンス」は平等であるべき

(4) 定年後男性の地域デビュー支援でご当地を「生涯活躍のまち」へ

- ① 定年後男性の地域デビュー支援が大事
- ② 「年金兼業型」就業としての「PPAP」「ずっと出番のあるまち」へ
- ③ 高齢者は体力だけではない。60代後半まで伸びる結晶性知能
- ④ 「おばあさん仮設」
 - ・ 「人間は生物としては異例で自らの生殖役割を終えた(閉経後の)個体がずっと長生きをする。ここにこそ人類発展の条件があった」
- ⑤ 養老サービスから「幼老」サービスや「積極的老老介護」へ

(5) 新しい家族縁や新しい地縁をつくる

- ① 経済成長と人口増は生活満足度を高めたか（イースタリンの逆説）
「選べるつながり」が幸福感を高める
- ② 日本の「縁」は多様であった
 - ・ 儒教社会の中国や韓国よりも血縁に拘束されなかった日本。
 - ・ 日本は、地縁や血縁の外に自由な縁をつむぐ伝統のあった日本
- ③ 新しい家族縁、地縁、仕事縁は必要縁
- ④ 新しい居住と家族縁：鹿児島市のナガヤタワー
 - ・ 新しい家族を目指す現代の長屋
 - ・ 高齢者の終の棲家
 - ・ 里親のもとで暮らす子どもたちの住居、発達障害の子供たちのデイサービス施設などで、高齢者との交流
 - ・ 学生は、高齢者のゴミ出しなど生活支援で家賃が安くなる。
- ⑤ 空き家が増大するなかで、ケアと居住をつなげる地縁づくりを

⑥「共生＝ごちやませ」の地縁づくり：シェア金沢

- ・障害者就労の事業、障害児の居住施設、サービス付き高齢者向け住宅、学生アパートが「ごちやませ」暮らし

(6)まとめ

①日本の地域ですすむ重量挙げ化と漏斗化：2040年問題

②ピンチは「誰もが人財のまち」「ずっと出番のあるまち」「必要縁でつながるまち」へのチャンスでもある

③チャンスを現実化するために政治の役割は大きい

※・部局の縦割りを越えた包括支援の場づくり

- ・雇用の部局や地域の企業を福祉の包括支援につなぐ
- ・「ずっと出番」のメニューづくり：シルバー人材センターや「地域デビュー塾」
- ・居住支援協議会を設置しケアと居住をつなぐ地縁づくり等

所感

日本は、少子高齢化と言われて久しい。国や地方自治体等において様々な施策や対策が実施されてきたが、状況は深刻さが増すばかりである。

戦後、大家族で子供や高齢者を家族で見守ってきたが、時代とともに核家族化により家族が分離化されること、そして少子高齢化でますます家族での見守りが困難となり、行政や地域で、子どもたちや高齢者を見守らなければ地域が成り立たない状況になってきている。

大野城市は、昭和46年に南地区が全国で初めてのコミュニティ地区(新旧住民の交流や融和を図る)に指定されて以来、先人達の努力により、コミュニティ都市として大きく発展してきた。平成29年11月に「日経ビジネス」誌の住みよいまちランキングで全国1位となった。

しかし、大野城市にも少子高齢化の波が押し寄せていることから、子どもたちや高齢者を見守るためには、行政だけではなく、地域の重要性がさらに増してくると思われる。

そのためには、行政の横の連携とともに地域との連携、そして家庭と地域の連携が必要不可欠と思われる。

この大きな課題に対して、議会・議員が研究するとともに、執行部と連携を持って対策を打っていく必要がある。

—作成者 田中 健—

自民まどか・自民大野城 視察報告書

研修者	天野嘉久孝、田中健一、高山やす子、森和也、中村真一、関井利夫、 山上高昭、井福大昌
日時	平成30年11月15日(木)
場所	宇都宮市文化会館
テーマ	検討課題 「議会と住民の関係について」
対応者 (講師)	コーディネーター 江藤俊昭 山梨学院大学院研究科長・法学部教授 パネリスト 今井 照 公益財団法人地方自治総合研修所主任研究員 本田 節 有限会社ひまわり亭代表取締役食・農・人総合 研究所リュウキンカの郷主宰 神田誠司 朝日新聞大阪本社地域報道部記者 小林紀夫 宇都宮市議会議長
概要	<p>パネリストが、コーディネーターの統制で意見交換を行った。</p> <p>本田：人吉市のふるさと自慢、人口減少、AI導入、外国籍住民の増加などで、自治体の財政力低下 主婦力を活かした起業、ひまわり亭は自治体とのパートナーシップだが、補助金はもらっていない。キーワードは「もったいない。」地産地消、見守り弁当・安否確認、食のネットワークづくり、女子力（知恵・経験・技）の活用、熊本地震への炊き出し支援、老若男女が助け合い、励まし合っている。</p> <p>神田：新聞記事で13議会を紹介、議会そのものが住民を代表している組織になっているか？議員は、男性、中高年、自営業が多く、考え方が偏らざるを得ない。議会報告会は、「聞くことが一番大切」話す力よりも聞く力</p> <p>小林：議会改革・制度改革で、どれくらい成果が上がっているか。議会は執行権を持っていないが、それでいいのか？根本的な解決にならないのではないのか。地方制度を見直す必要があるのではないのか。</p> <p>今井：市議会議員選挙の、無投票当選者比率は低い。市議会に対する市民の関心は一般的に高いが、行政への期待が高く、議員・議会への期待は低い。議会は、市民と遠い組織である。</p> <p>本田：住民サイドから考える新しいコミュニティのあり方～議会とともに～ 地域課題から見る、コンパクトなまちづくり、体制づくり、まず何をやるか、誰たちと、具体的な活動として、目指すのは住民から信頼される議員とはー議員は地域のリーダー ミッション（議員としての人格・使命感） パッション（住民自治の根幹として議会人としての誇りと情熱） アクション（実践、行動住民参加型のまちづくりやボランティアに積極的に関わる）</p> <p>今井：市民活動から議会への問いかけ 議会として、市民活動と協力できる余地があるのではないのか 自治体政治の総量を上げる</p>

政治の本質

「議員のなり手」がいることのほうが不思議？

若い人は政治が嫌い、批判・もめる、争うことの楽しさ

小林：政策討論、自由討論など、議会と住民を近づけるには、どういう手法がいいか？

選挙制度改革

人間は、10人からなら選べるが、宇都宮の定数は45名、立候補者約50人の中から選ばないといけないので、なかなか選択できない。

神田：フリースピーチ制度、議会だよりのモニター制度など、積極的に住民にアピールしているところがある。会津若松市は、市内15か所で意見交換会をやっている。選挙の投票率が低いが…縛りが多すぎる。改革の中に住民を入れてはどうか。

小林：公職選挙法の改正、議員の任期はなぜ4年なのか、6年でもいいのでは？ドイツは9年である。

現状では何ができるのか。議長の任期を伸ばしてもいいのでは？

神田：議員は市民の代表であり、ワークショップ・グルーピングを活用して意見聴取

本田：若者が政治に関心を持つようなまちづくり、郷土愛を育む。

今井：制度論も出てきたが、すべての市町村に適用するのは…みな同じにはならない。特性に合った制度改革が必要

江藤：議員のなり手不足、新しい議会の役割は？合意形成、横串をまとめていく。市民社会も大事だし、議会も大事。公共施設も老朽化してくるし、財政危機も予想される。どこまで行政が責任を持っていくか。住民が議論して、地域提言は議会へ。なり手不足は、議会の魅力化を図るため、議会モニターや議会だよりモニターなどを活用する。

所感

議員は地域のリーダーであるという言葉が、特に私の中に残った。地域の方々の意見を吸い上げ、その意見をどのように市政に反映させていくか。意見の吸い上げ方も、意見交換会などいろいろな方策を考えていかなければならない。あらためて、襟を正す気持ちである。

また、市民の関心をいかに議会に向けていただくか、本市は議員のなり手不足はないが、投票率の低さは関心の低さを示していると思うし、議会報告会・意見交換会への参加人数も少ない。

改革の中に住民を入れるという発言もあったが、本市議会が行っている議会報告会・意見交換会、議場開放、中学生模擬議会などの更なる活性化を図るとともに、議会モニター・議会だよりモニター、市民フリースピーチなど、先進自治体の施策をTTP（徹底的にパクる。）し、市民に関心を持たれより機能性が高い理想の議会に少しでも近づけるよう、微力ながら努力する所存である。

—作成者 森 和也—